

題目 「心の財布」の実証研究

氏名 岡元 晶子

指導教官 亀田 達也 教授

「心の財布 (mental accounting)」とは、心の中に複数の口座 (account)を持ち、自分の財産を管理するシステムのことである。そのシステム維持には、段階を経て行われる「予算行動 (budgeting)」が欠かせない。本研究ではそのうち、「必要な出費を適切な目的別の口座に割り当てる (post)」行為に特に注目した。

Tversky & Kahneman (1981)は、シナリオ実験において「割り当て」の働きを示した。この実験において参加者は、チケットを事前に購入 (ある口座への「割り当て」)しており、そのチケットを紛失した場合は、単にチケットと同額の現金を紛失した場合よりも、再びチケットを購入しようとしなかった。この結果は、同じ口座にこれ以上「割り当て」せぬよう自己制御が働いたためと考えられる。このことから、人は一度「割り当て」したならばそれに従い、「予算行動」に忠実であることで、財産管理に努めていると予測できる。

本研究では実験室実験でその証明を試みた。実験では「割り当て」を経験している条件と、経験していない条件を設けた。「割り当て」は「くじ引き券」を購入することで経験させる。「全くくじ引き券条件」は、数回のくじ引きの後、まだ券が手元にあり、「一部現金条件」は券を使い切り現金のみ手元にある。その後、残ったくじ引き券を使うかさらに現金を費やすことでくじ引きを続けるか、やめてしまうかの選択をさせる。「全くくじ引き券条件」の参加者は「割り当て」を経験しているので、その予算行動を守るため、券購入時の目的通りくじ引きを続けるだろうと仮定した。

しかし、結果は、条件を問わずほぼ全員がくじ引きを続けた。金額面などの問題点を改良した第二実験においても、結果はほとんど変わらなかった。

この結果は、実験のスタイル自体の問題によるくじ引きへの強い誘引が「予算行動」の効果を打ち消す「天井効果」が現れたため導かれたと考えられる。事後質問紙の回答から「くじ引きを続けた」原因を探ったところ、過去の研究で示されている、偶然手にしたお金は自分のお金という認識が弱く、使いやすくなる「windfall gain 効果」、少額のお金は使いやすくなる効果、最後の賭けで損失を穴埋めしようとする「break-even 効果」、過去の投資を無駄したくないため投資を続ける「sunk cost 効果」が生じていたと考えられる。また、仮に仮説どおりの結果が出たとしても、「予算行動」の効果ではなく、「授かり効果」がその要因となっている可能性も考えられる。

以上のことから、「予算行動」の効果を実験室実験で証明するには、他の要因の統制が必要であると思われる。また、先に挙げた様々な効果は独立ではなく、これらの効果を包括的に説明できる理論が存在する可能性も、今後の研究で検討する必要がある。